

社会的事象の概念的理解を深めるための発問とその効果 —共通性の探究を通して—

○青柳尚朗 (東京大学大学院)

藤村宣之 (東京大学)

キーワード：社会科，共通点探究，概念的理解

問題と目的

青柳・藤村(2019)では，社会的事象の概念的理解を深めるにあたって，事象の共通点・相違点を考えることが有効であると示唆され，自治体の行う取組の目的の共通性について述べる生徒はより本質的な解答をする傾向がみられた。そこで本研究では，社会的事象の概念的理解を深めるため，取組の目的の共通性を生徒に捉えさせるための発問とその効果について明らかにすることを目的とする。

方 法

参加者と実施時期 新潟県内公立中学校 3 年生 70 名 (男子 37 名，女子 33 名) を対象に調査を実施した。時期は 2019 年 6 月中旬から 7 月下旬にかけてであった。

調査内容と調査手続き 調査に先立ち，群分けを行うための事前課題を実施した。そして，前後の評価課題及び個別面接のいずれかを欠席した者ら 8 名を分析から除外した。その結果，目的群 33 名，内容群 29 名となった。個別面接は放課後に一人あたり 20 分程度で行った。介入課題は青柳・藤村(2019)の地域振興課題を再度使用し，両群ともに各取組間の共通点を探究させた。ただし，目的群では直接的に「取組の目的の共通点に焦点化して考える」ように，「取組の目的の共通点・相違点は何か」という発問を設定した。一方で，内容群では「目的について既有知識を基に様々な角度から自由に考える」ように，「取組の内容の共通点・相違点は何か」を考えさせた後，その目的を考えさせた。

結果と考察

実施した評価課題では本質的理解に至る規準として 4 水準に分類した。(3: 地域社会の維持・発展に関連づけている，2: 労

働力人口の増加に着目している，1: 個々の取組に着目している，0: 無回答など。) 事前と事後の回答人数の分布変化を Bhapkar 検定で検討したところ，目的群では有意な変化 ($\chi^2(3)=15.60$, $p=.001$) がみられた一方，内容群ではみられなかった ($\chi^2(3)=6.55$, $p=.123$)。目的群において，各水準間の移動について下位検定を行ったところ，特徴的な変化はみられなかった ($n.s.$)。また，目的群で事前から事後にかけて水準が向上した人数と低下した人数を二項検定で検討したところ，有意な偏りがみられた ($p=.002$) 一方，内容群ではみられなかった ($p=1.000$)。

以上の結果から本質に向かうにあたって共通点を探究する際には，「目的」の共通点のように，設定する「共通点」を明確にしたうえで，生徒に問いかけることが重要であると示唆された。一方で，目的群において最高水準に達した生徒は 7 名と行動主体 (今回では自治体) の行動原理まで捉え解答する生徒は少数であった。今後は生徒の発話分析を行うことで，水準 3 と水準 2 以下の生徒の差異を明らかにすることで，概念的理解を深められている生徒の特徴を見出すことにつながるだろう。

Table 1 目的群における水準の変化

事後		実験群			
事前	①	②	③	計	
①	0	2	1	0	3
②	0	9	6	4	19
③	0	1	6	2	9
④	0	0	1	1	2
計	0	12	14	7	33
群内比較					
検定結果		$p=.001$			
下位検定					
検定結果		$n.s.$			